大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

113

古矢知白

名著出版刊

NANJING UNIVERSITY OF CHINESE MEDICINE
南京中醫藥大學
1954
南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 113 古矢知白 第Ⅳ期 全16巻

昭和五十九年五月二十五日 発行

編者 大塚敬節 矢数道明

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七—一〇五九四番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347—1069—8324

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

凡　例

一、本書第一一三巻「古矢知白」には、『症因問答』『正文傷寒論復聖弁』『傷寒論正文復聖解』を収録した。

一、本書は全て影印版によったが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略したところもある。

ホ、印刷不明な個所は、補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

『症因問答』版本　（弘化四年版）　三巻三冊　（大塚恭男所蔵）

『正文傷寒論復聖弁』　写本　二巻二冊　（大塚恭男所蔵・昭和16年、日本食薬研究所覆刻本）

『傷寒論正文復聖解』　版本　（文久三年版）　四巻四冊　（内閣文庫所蔵）

一、解説は、大塚敬節が日本食薬研究所で『正文傷寒論復聖弁』を覆刻した際記述したものを影印し、大塚恭男（北里研究所附属東洋医学総合研究所副所長）がまえがきを記した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

大塚恭男

この度、『近世漢方医学書集成』の一つとして、古矢知白の『症因問答』、『正文傷寒論復聖弁』、『傷寒論正文復聖解』が復刻されるはこびとなったことはまことに喜ばしい。

これらのうち『正文傷寒論復聖弁』は昭和十六年に、日本食薬研究所から復刻されており、この復製本の底本となった写本の提供者が筆者の先考大塚敬節で、問題の写本は昭和十三年八月下旬の暑い日に、浅草の浅倉屋書店で求めたという。この昭和十六年の復刻の際に、大塚敬節が著わした「正文傷寒論復聖弁解説」は、父が知白を知って得た感動を生き生きと伝えており、さら

に古矢知白の人と業績についても簡にして要を得た解説を与えている。

今回の復刻に際しても、この解説をそのまま再録することとした。実をいえば、筆者自身、昭和十六年に父がこのような解説を著わしていたことを今まで知らなかった。まことに不敏、恥じ入る次第であるが、この解説を読んで興味深かったのは、一つは、もちろん知白その人のことについてであるが、いま一つは、父の漢方遍歴の軌跡について考え直さねばならない点を教えられたことにある。

父が昭和十三〜十六年という、三十代後半より四十代初めという時期に易理と『傷寒論』との関係に関心を持ったということ、そしてその関係も単なる机上論にとどまらず、臨床に応用することによって実証し、新しい理論体系を構築しようとした古矢知白の姿勢に感動し、共鳴したのであり、このことは、私にとっても十分理解し得る気がするのである。

昭和十六年という年は、父の生涯の中でも特別な意味をもっている。この年に、南山堂から、矢数、木村、清水三氏との共著で『漢方診療の実際』が刊行された。西洋医学の疾病分類に従って漢方治療を述べた最初の書物として、画期的なものである。さらに、巴陵氏の『西洋医学史』と合著の形で『東洋医学史』を著わし、山雅房から刊行した。そして、規模の上では上の二著より遥かに小さいが、この古矢知白の発見と、その著書の復刻である。この年の暮には太平洋戦争が始まり、暗い時代に入っていくのだが、昭和十六年の父の大活躍は、そのシュトルム・ウント・

ドランクの時代の総決算と考えてよいのかも知れない。

私的なことを長々と記して恐縮であるが、父敬節の「古矢知白とその著述」の前置きとする。

正文傷寒論復聖辨解說

序詞

難波潮浩

大塚敬節

序詞

難波潮浩

序詞

江湖の絶愛と期待とに負かず、こゝに「正文傷寒論復聖辨」上下二卷の豪學的刊行事業は、新星日本食藥研究所の捨身的幾多の犧牲のもとに、全く完成された。利害を超越した、所謂る日本的飛躍の精神力を盡して、出版の一路に生き拔いた日本食藥研究所々員ならびに、貴重なる自己の珍惜品を學界のために私積とせず、すゝんで是を貸與され加ふるに、簡明なる解說を垂示された大塚敬節先生に、私は今更ながら改めて、衷情を以つて、滿腔の感謝を呈したいと思ふ。如何なる名著も、讀む者に依り、益不利益の相違あることは、敢て贅言を要しない事實ではあるが、少くとも本書を手にする程の篤學先見之士は、必ずや私が嘗て求めし所のものを利得するであらうと信ずる次第である。さて然らば、私は嘗て如何なるものを探求しつゝあつたか。私は貧弱なる一人の日本學の學徒に過ぎない。從つて、易學に淺く、又醫學にも勿論素人である。この一人の日本學徒が、あらゆるものを日本學の範疇から說明したい焦思から突きあたつた易理と醫學との關係段層面に觸れた部分が、この復聖辨であると告白すれば、さぞかし讀者の一人位は肯定して呉れるであらう。對象論的な論說を今こゝで試みる必要はないのだから序詞の責任を果す意味で、次に易學と醫學との交涉面の一片を示し、委細は、他日の機會に讓ることにしよう。

漢方醫家の中にも易學と醫學とについて一見識を持ち、易の思想的內容は直接には餘り深い影響を醫學に與へてゐないと主張される方もあるが、これは觀察面の相違であつて、一つの有力なる學說である。しかし他の方面から考察すれば、反對に、思想的內容なるが故に、深い影響があつたのではないかと思はれる一つの有力な學說が嚴存する。それには、易の基礎的研究が要求されるであらう。かの有名なるドイツの哲學者ライプニツツすらこの易に對する根

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本的な原理の研究には失敗してゐるのである。強ち外國人を例にとらずとも食養學の基礎原基として陰陽論を主唱する人々にもこの大きな缺陷と誤解が着色されてゐる。私は常に主張してゐるのであるが、易は勿論支那から發達したものであらうけれども陰陽學は必ずしも支那から起原するものではなかつた。生命を一つにする人間には、必然的に陰陽論の同時的起原を認めなくてはならない。支那文化に易理が存在せし如く、エジプトにも、ギリシアにも、バビロンにも、日本にも原始思考型として立派に具備されたものである。單に支那では易學として別個の樣式を以つて發展したに過ぎない。易の起原については、他日に委すことにするが、支那思想は易と老子の二種類に要約されると極論する學者もある通り、何といつても易學の研究を中心と看做さねばなるまい。

易は元來星學から起因するものであるから、人體生理や人體病理との關係も極めて密接であるべきである。何故かといふに、生物は天と地との相感から發生するからである。如何なる細胞も天と地との調和がなければ、生命として意味はあり得ない。この點は、よく我が古典に示されてあるから、讀者は比較研究の立場から一讀せられたい。されば こそ易と醫學との交渉は、天と地とによつて深刻になる。天文學氣象學地文學は、易學と醫學とに人情味を與へるものである。されば こそ、世界に於ける聖典法典の中には、陰陽と醫學との融化現象が伺はれるのである。ペルシアのアヴェスタ經にも、エジプトの死者の書にもアラビヤのコーラン經にも或はバビロンに於けるハンムラビ法典にも佛典にも、それらの思想が宗教化して表はされてゐる。しかして宗教化されることは神の垂示に信服することを意味することになるから生命問題として、陰陽醫學が天地宇宙觀世界觀人生觀と交渉を保つに至る。春秋繁露人副天數第五十六に一物は疢疾にして能く天地に偶することなし。唯人獨り能く天地に偶す。人に三百六十節あり。天の數に偶するなり。形體骨肉は地の厚きに偶するなり。上に耳目の聰明あるは日月の象なり。體に空竅理派あるは川谷の象なり。心に哀樂喜怒あるは神氣の類なり。人の體を觀るに一に何んぞ高物の甚しくして而した天に類するや。物は旁く

天の陰陽を折り取つて以つて生活するのみ。而して人は乃ち爛然として其れ文理あり。……是の故に人の身首は円す天の容に象るなり。髮は星辰に象るなり。耳目は日月に象るなり。鼻口呼吸は風氣に象るなり。胸中達知するは神明に象るなり。腹胞實虛は古物に象るなり。」とあるが、如何にも私說を裏書きしてゐることが了解されるであらう。萬一この引用句も迷信として採用を拒否されるとすれば、現代物理學の原理も否定されねばならないであらう。又史記の一節に曰く「扁鵲天を仰ぎ歎じて曰く。夫子の方をなすや。管を以て天を窺ひ郤を以て文を視るが如し。越人の方をなすや。脈を切るを待たず。色を望み聲を聽き、形を寫し病の在る所を言ふ。病の陽を聞き。論じて其の陰を得。病の陰を聞き。論じて其の陽を得。病の應は大表に見る。千里を出でず。決する者至て衆し。曲止す可らず。子吾が言を以て誠ならずとせば試みに入りて太子を診せよ。」と。或は史記扁鵲倉公列傳中には症候學的病理に依つて內臟全體の統一治療理論をも說明してある。されば支那の古代思想を檢討するときは、恒に陰陽五行說の存在を忘却することが不可能である。從つて陰陽と五行は、範疇であり萬有の元素であつて、後に陰陽五行說に發展し、宗教哲學的色彩を帶ぶるに至つた。誰人も知るが如く五行の思想は書經洪範に見はれ、陰陽の思想は實に周易を以つて、その應用の領域とする。さればこそ孔丘と雖も道義を重じ、周室尊崇の根抵には、深く陰陽五行學の信念あるを世人は確認する必要があらう。從つて論語一篇を以つて、彼の思想全部を反陰陽五行說となすこと勿れ。漢書藝文志諸子略に、陰陽家二十一家三百六十九篇を擧げてゐるが、何れも前說の如く占星曆象卽ち天文學の流れを汲む者である。泰一陰陽、黃帝陰陽、黃帝諸子論陰陽、諸王子論陰陽、太元陰陽、三典陰陽談論、陰陽五行時令等の記載が、漢書五行の書目にあるが、結局は太極陰陽說或は太一陰陽說に歸することになり、更に醫學の關係に於て融合される。傷寒論と陰陽五行學との問題は、今後とも學術的に研究せらるべきものであつて、日本醫學者にあらざれば、解決は不可能であらうと思はれる。素問靈樞にしても、本草綱目にしても、傷寒論にしても、漢土の產物でありながら、自製の易經では科

學的に說明されなかつたのである。かかるが故に、易は醫學にあまり影響を與へなかつたと斷定する學者を產むに至つたのも無理はない。しかし日本醫學の學徒の手に委ねらるれば、容易に解說して呉れるであらう。「正文傷寒論復聖辨」の著者古矢知白翁こそ、當時に於て大成した一人であるまいか。病根精義辯の著者金吉景山が「易ト傷寒論トハ一理ニシテ兩立スルモノニシテ、聖人河洛ニ則トリ、一陰一陽ノ道ヲ以テ萬病ヲ治スルノ敎ヲ立ツルモノハ傷寒論ナリ」と斷じたことは、正しいとしてもかかる易醫論者と知白翁とを同一に談することはできない。知白翁は日本學的展開の中に傷寒論を易學的に統一解明したのである。復聖辨中「日東易蘇」(高松貝陵著)に言及するあたり、誠に翁は復古思想を以つて、日本魂を以つて、漢土の學者に傷寒論の易學的研究の範を示した大恩人である。又東西醫學の根本たる生物學的原理が、陰陽說であることをエールリッヒ氏の側鎖學說より說明した渡邊松園先生も、同じく知白翁の如く日本的學者であつた。故に同好の士の忘れ得ざる醫家であることを追記する。

私の追求して止まざりしものは、大體以上で暗示できたと思ふ。尙醫學と易學との交涉面については、知白翁の原文をよく玩味されれば、それが一番正しく理解されるであらう。もつと具體的にいへば、日本學的に傷寒論を易學理論で說き、治病學の大成に突進し、藥味の性能配合或は藥草の成分、分量等を近代の醫化學や生化學や藥物學や藥草學等の達し得ざる物理化學的な深奧の一部に於て解決して呉れたことである。故に知白翁の全文をよく味讀すれば、治病の理想的體系が、將來に暗示されてゐることを窺知するであらう。更に食物の陰陽も、藥草の陰陽も、分量の陰陽も、誤り傳へられた食養家の虛僞も、その大半は訂正され得る。勿論知白翁の全部が正しいとは言はぬ。只だこの日本的信仰のもとに、かくまで易理を醫學に應用したその根本の精神と方法論を模範として、近代科學の研究に參考とすれば、如何なる新しき未知の眞理が、醫學上發見されるであらうかを極力主張するに止まるものである。讀者よ復聖辨の精神を、よく〳〵味得されよ。知白翁は決して漢土崇拜の徒ではなかつた。醫學も然り。易理も然り。何れ

も日本人たる知白翁その人のものであつたことを想起されたい。

最後に注意して置きたいことは、日本のことは何でも支那の陰陽五行說から起つてゐると信ずる徒の未だに存することである。陰陽、男女、天地、日月、春秋、夏冬、左右、前後、東西、南北、明暗、上下、寒暑、溫凉等々の相偶相對の概念は、何れの民族にも獨立に發達し得るものであつて、漢土に於ては、特に陰陽の二氣に歸したのであるが、我が神代に於ては、その必要を（陰陽の作用たる名稱）認めなかつた。その代り、かしこくも、神名を用ひ給ひてあらゆる作用を說明されたのである。從つて我が大和民族と漢民族とは古く交通接觸の便利はあつたにせよ、民族心理と國土成立の根本的差違によつて、我が國の對偶的觀念は、漢民族の陰陽說とは何等の關係のないものである。我が國の傳說、史實、風習を仔細に吟味せられよ。そこには原始的に純粹なる日本の香りのみがあるであらう。漢土の陰陽說は、數理的には、二、四、八……と進展するが、我が國では二、六、十二或は二、三、六、八、十、十二と開進する。極めて單純にして複雜である。この數的理論體系を念頭に納めて復聖辨を十分に研究せられんことを讀者に希望して序詞の最終の責務を果し得たとすること斯の如し。

昭和十六年六月

日本の夜明を待ちつつ

難波潮浩

正文傷寒論復聖辨解說

大塚敬節

正文傷寒論復聖辨解說

大塚敬節

一、はしがき

昭和十三年の八月下旬の暑い日に、私は往診の歸途、淺草の淺倉屋書店に立寄つた。みると正文傷寒論復聖辨といふ帙入り寫本がある。著者は古矢知白となつてゐる。私はそれより前に病因問答といふ書物を通じて、古矢知白を知り、その識見の非凡に驚き、もつと深く知白の醫學を研究してみたいと考へてゐた時であつたから、早速その寫本を買求めて歸つて來た。此書は上下二冊からなり、浪花の利貞といふ人が處々に朱をもつて識語を書いてゐるが、この利貞といふ人も相當の學者であつたらしい。又奥書に森村二郎といふ人が、此書は予の先考が愛讀して日夜手から離さなかつたものであるといふ意味のことを書いてゐる。この森村二郎といふ人は、竹軒と號し、昭和十年頃まで上富士前で易者をしてゐて、七十有餘歳の高齢でなくなられたといふことである。私は竹軒翁には直接面會の機を得なかつたが、昭和五年、湯本求眞先生の門にある時、上富士前に森村竹軒といふ漢方をよく理解した易者がゐるといふお話を承つたことがある。竹軒翁は非常に變つた學者で、その識見も亦凡ならざるものがあつたと聞いてゐる。私が此時購入した正文傷寒論復聖辨は、いふまでもなく竹軒翁の舊藏で、翁も亦此書を愛讀したものである。ところが此書は私の手に入つてからは、轉々として友人間を渡り歩いて、一ヶ月と私の手許にとどまらない。入手して既に三ヶ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com